



『宇宙からの帰還』 立花 隆

アポロ9号の宇宙飛行士、ラッセル・シュワイカートは「宇宙体験をすると、まえとおなじ人間では有りえない」と意識の劇的な変化を語っている。これは立花隆が本書でインタビューしたすべての宇宙飛行士に共通する見解だ。アポロ15号で月に行ったジム・アーウィンなどは地球に戻ってから宣教師になってしまった。いったい何が彼らを変えさせたのか。

人類史上はじめて宇宙空間を遊泳したユーリ・ガガーリンは「地球は青かった」という有名な言葉を残している。水と大気がつくりだした地球の壮絶なまでの青さ、美しさ、神々しさが宇宙飛行士たちに途方もないショックを与えたという。宇宙と地球にしか生命が存在しない死の空間のなかで「自分と地球を結ぶ、切っても切れない生命という紐帯の大切さを認識せずにはいられない」のだ。建築家、数学者、思想家など多彩な顔を

もつバックミンスター・フラーが提起した「宇宙船地球号」の概念を文字どおり肌で実感したといえるだろう。

したがって彼らは否応なく生命圏(バイオスフィア)としての地球の運命に人並み以上の関心を抱かざるをえない。シュワイカートは「人間がいまのようにバカげた生活をつづけていけば、つまり、エネルギーを浪費し、資源を浪費し、環境を害し、しかもお互いに殺し合うという愚行をつづけていけば、人類のもつ最大の可能性である宇宙への進出を不可能にしてしまうということも起こりうる」と警告している。

宇宙飛行士たちのメッセージは来たるべき未来を先取りした究極の啓示とっていい。「宇宙船地球号」が激しく揺さぶられているいま、すべての人類が(地球人としての私)に目覚めるときを迎えている。(高倉)

○中公文庫・定価800円(税別)／たちばな・たかし
1940年長崎県生まれ。東京大学文学部卒。ノンフィクションライター。著書に『田中角栄研究・全記録』(講談社文庫)、『脳死』(中公文庫)など多数。

三栄商会社長

故・吉田慶二氏を偲んで

(株)三栄商会(本社・東京都新宿区四谷四―二十八、吉田慶子社長)の社長・吉田慶一氏が昨年十月九日、誤嚥性肺炎のため、入院先の赤坂・前田病院で長女慶子さんの見守るなか逝去した。享年九十七歳。通夜・告別式は十月十二、三日の両日、四谷(長善寺)笹寺で喪主・慶子さんにより家族葬で営まれた。

慶一氏は大正八年一月三日、新潟県柏崎市に生まれた。十代の頃、単身上京し、二十七歳で同郷のトイ子さんと結婚、一男四女をもうけた。昭和二十二年、吉田商店を創業し、二十七年七月に(株)三栄商会設立、現在に至っている。生涯現役で社長業を貫いた慶一氏は、責任感が強く几帳

面ゆえに厳しい面もあったが、心優しく、短歌をたしなむ風流人でもあった。七年前、トイ子夫人に先立たれ、弊社発行「月刊コア」に二十年以上寄稿していた短歌のコーナーにも亡き妻を想う歌を数多く詠んでいる。

納棺の時、絶筆となったコア七月号のコピーと共に業界最長老社長は旅立った。

(長谷川)
「コア二〇〇六年七月号より」
最愛の妻と娘を伴い
フランスを旅した思い出の句

凱旋門

くぐる妻娘の
ささやきに
たまには箸で
食べたいものネ